

論文

学校不適應（中一ギャップ）解消に向けての小中学校連携の試み

The study of the method that an elementary and junior high school cooperates and cures children refusing to go to school.

佐藤 憲夫

名寄市立大学保健福祉学部 非常勤講師

【要約】

小学校から中学校への移行期に、学校不適應（中一ギャップ）となる生徒が増加しているのは憂慮すべき問題である。

M中学校（道央の中規模校）では、校区の2つの小学校の6年生児童とその保護者を対象として2月に進学にあたってのアンケート調査を実施した。その後、当該生徒が中学生となった5月に、現在の中学校生活に関する再質問を実施した。目的は、中一ギャップの未然防止である。これらの質問紙調査から、①中学校入学にあたって抱えている不安心配の具体内容 ②入学後にその不安心配が解消されたか否か ③中学生になった現在抱えている不安心配の具体内容一などが明らかになるとともに、いじめの存在も発覚した。

これらから、小中学校が連携して中一ギャップに陥らせないために教師の“不安解消のアシスト”を強化することの効果と、小中連携の視点を提供することができた。

キーワード：学校不適應 中一ギャップ 小中連携の視点 アンケート調査 不安解消のアシスト

1. はじめに

小学校から中学校への進学（移行）期に、学校不適應をうったえる子どもたちが増加の傾向にある。学校不適應とは、本来楽しいはずの学校生活に苦痛を感じるようになり、学校生活自体に意欲を失ってしまう状況である。「学級に違和感がある、居場所がない、学級に入れない」などから、「不登校」に至るケースや「暴力行為、授業妨害、授業抜け出し、授業中の校舎徘徊」など、反社会的行為などの形で表出されるケースもある。

このような学校不適應状態にあるすべての子どもたちの実数を把握することは困難であるため、ここではひとつの表出である不登校状態にある児童生徒数を例示し概括したい。文部科学省による「不登校」の定義は、病気と経済的理由以外による年間 30 日以上 の長欠児童生徒である。

同省の平成 26（2014）年度「学校基本調査（速報）」によると、過去 5 年間減少する傾向にあったが、小中学校とも増加の傾向を示した。平成 25 年度不登校児童生徒は、全国で 11 万 9,617 人、前年度比 6,928 人の増である。全国の小中学校で、86 人に 1 人が不登校である計算となり、増加の傾向を示している。特に中学校では増加幅が大きく、学級に 1 人は不登校生徒がいる計算になる。

北海道は中学校で、平成 25 年度 3,408 人と前年度比 14%増加し、26 年度も 3,478 人と微増の傾向にある（全道中学校長会調べ 27 年度）。道内においても全国と同様、生徒 38 人に 1 人、道内すべての中学校の学級に不登校生徒が 1 名いる計算となる。

2. 学校不適應（中一ギャップ）の原因と対策

中一ギャップの原因について、臼井（2012）は、多くの知見をレビューする形で次のように紹介している。— 小泉（1997）は、学校移行を小学校から中学校という異なる環境間の移行ととらえて、両者の環境の違いをいくつか挙げ、（教科担任制、友人関係の変化、上級生とのかかわり、部活動など）これらがプラスに働く場合もあるが、危機的に作用することも少なくない、とした。また、富家・宮前（2009）は、小中学校教師に対して中一ギャップの原因を自由記述により回答を求めた結果、教師と子どもたちの関係について、小学校教師は約 3 割が中学校教師の接し方が厳しいことを原因に挙げているが、これは中学校の教師では 2 割以下になっている。また、学業に関しては、小学校教師では定期テストやテストに依存しすぎることや生徒同士の成績の順位を問題にするなどの評価システムの問題を指摘する者が多かったが、中学校教師では小学校卒業時点での基礎学力の不足をあげることが多かった。このように、「中一ギャップ」そのものの存在については小中学校の教師間でズレはなかったが、そのとらえ方には小学校と中学校の教師ではかなりの違いがあった、と述べている。

また、中央教育審議会初等中等教育分科会は、次のように指摘している。

- 児童が、小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活へうまく適応できず、不登校等の問題行動につながっていく事態が指摘（いわゆる「中一ギャップ」）。

- ◇ 「授業の理解度」「学校の楽しさ」「教科や活動の時間の好き嫌い」について、中学生になると肯定的回答をする生徒の割合が下がる。
- ◇ 「学習上の悩み」として「上手な勉強の仕方がわからない」と回答する児童生徒数や、暴力行為の加害児童生徒数、いじめの認知件数、不登校児童生徒数が中学校1年生になったときに大幅に増える。
- 中1ギャップの原因として、小学校から中学校に進学する際の接続が円滑なものとなっていないことが考えられる。その背景として、例えば、以下のことが考えられる。

<学習指導面>

- ◇ 小学校では学級担任制、中学校では教科担任制（授業形態の違い）
- ◇ 各児童生徒の小学校時点における学習上の問題が中学校と十分共有されていない（学習上の問題の共有が不十分）

<生徒指導面>

- ◇ 中学校は小学校と比較して生徒に課せられる規則が多く、小学校よりも規則に基づいたより厳しい生徒指導がなされる傾向（生徒指導方法の違い）
- ◇ 各児童生徒の小学校時点における生徒指導上の問題が中学校と十分に共有されていない（生徒指導上の問題の共有が不十分）。以上に加え、上級生や教職員との人間関係も小・中学校間で違いがあるといった多様な背景がある。
- こうした中1ギャップを乗り越えるために、学校、市町村においては小中連携、一貫教育の推進が期待。（○◇の記号は原文のまま）

また、中学生期の心の不安定さも従来から指摘されている。中学生への移行期はピアジェの具体的操作から形式的操作への移行の時期でもあり、小学校から中学校の授業内容が格段に難しくなる。これに加え子どもの心理面、生理面での急激な発達期であるところに、“心の揺らぎ”と表現される不安感と不安定な危うさが、様々な学校不適應の表出に影響を与えるといわれる。原因がはっきりしない学校不適應の場合、友人との些細なトラブルが引き金となって学校生活への意欲低下を引き起こす場合も多いのだが、往々にして教師はその原因を探しあぐね、もしくは“不登校”という目の前の出来事の解決を急ぎ、感情移入するあまり指導の方向性を見失ってしまうような事態も学校現場では発生している。北海道中学校の場合、不登校生徒の理由の中で「本人にかかわる問題」79.7%、「家庭生活での影響」10.9%、「学校生活での影響」9.4%であり、「本人にかかわる問題」とする比率が年々増加しつつある。（全道中学校長会調べ 27年度）このことは、教師や保護者の立場からは当該生徒の不登校原因をつかめず、学校生活意欲・気力の低下を、「本人にかかわる問題」とせざるを得なかったものであろう。

3. 小中学校連携の新たな視点

M中学校は、道央の地方都市にある中規模校である。2校の小学校から入学してくる生徒は約90名、各学年3学級編成である。学校状況は落ち着いており、しっかりと学習指導や

積極的な生徒指導ができる状況にある。不登校については各学年1名ほど全校で2・3名であり、全国全道平均よりも格段に少ないが、毎年少数ながら学校不適応（中一ギャップ）となる生徒が存在する。この指導の方途として、新たな視点からの小中連携を試みた。これまでの小中学校の“連携”は、年に一度3校が持ち回りの幹事役となり授業公開、生徒指導の交流会を実施していた。協議は全教師が参加し、かつて担任をした生徒の成長、変容にも話題が及び「これからも小中連携をして、この地区の子どもたちの健やかな成長を育て見守る教育活動をしていきましょう」など、盛会裏に終了するのであるが、毎年この「3校交流会」は単発の行事的な研修会に終始し、日常の教育活動として定着しない状態であった。また、既述した富家・宮前（2009）の「小中学校教師に対して中一ギャップの原因を自由記述により回答を求めた調査」に見られるものと同様の状況（小学校と中学校の教師の学校不適応に対する認識の齟齬）なども感じられた。

中一ギャップ解消のための“連携の新たな視点”を提案することを目的として、まず小中学校の校長による協議をおこない試案を策定した。視点は、“新入生と保護者の不安心配の把握と解消”である。校長としての教職経験から、中学校入学の早期に不安や心配を取り除き、新しい学校環境に順応を促すことが担任教師、同級生、上級生などとの人間関係を安定させるうえで有効であろうと仮説を立てた。6年生児童と保護者が抱く中学校進学の際の不安心配内容を調査し、それを小中学校が把握したうえで具体内容に則した指導や積極的に教育活動をおこない、半年後に再度中学生となった生徒にアンケート調査を実施し指導効果を検証する。また、保護者に対しても同様に不安項目を調査するアンケートを子どもと同時期に2回実施し、不安解消が図られたかを振り返る、というものである。

4. 本研究（試案）の意義とねらい

中学校への入学（移行）期に、学校生活への意欲の低下や学校不適応いわゆる中一ギャップ状態となる生徒が増加していることは憂慮すべきことである。このような状態に陥る原因と対策については多くの知見があるが、その地域の特性や文化、小中学校の規模や関係性などの相違や多様性により、各地各校にそれぞれの中一ギャップがある。それゆえ学校不適応の原因を各学校で探索し、自校に応じた解消のための教育的な手立てをとらなければならない。共通していることは、この年齢の子どもたちの心の不安定さ、思春期の心の揺らぎの中で日々学校生活を送っているという事実であり、子どもたちの心配ごとや悩みを教師が受け止め、寄り添い理解しようとする姿勢の重要性である。子どもたちは、自分の悩みが分かってもらえたと感じたとき、教師を信頼し、自分に自信を取り戻して成長する。このような視点に立ち、小中学校が連携をして、積極的に児童生徒と保護者から中学校入学にあたって不安に感じていることがらを調査し、その解消に努めることで、中一ギャップの表出を防ぐことをねらいとする。本試案は、子どもたちと保護者の声に小中学校が連携して耳を傾ける機会を設定することの効果を検討し、中一ギャップの防止に何らかのヒントを提供するものである。

5. 方法

(1)対象者

平成 24 年 4 月にM中学校に入学をする小学 6 年生とその保護者。D小学校児童 66 名、H小学校児童 17 名、児童計 83 名と保護者。

(2)調査方法

「中学校へ進学するにあたっての意識調査」(児童・保護者対象) 2月上旬に実施。

「入学後の中学校生活についての意識調査」(生徒・保護者対象) 5月上旬に実施。

調査は、「意識調査」としてアンケートに回答を求める形でおこなう。児童生徒については、学級活動の時間に一斉に担任教師が指導し実施する。保護者については、小中学校から“お手紙”の形で回答依頼をする。

児童への「中学校へ進学するにあたっての意識調査」実施にあたって小学校担任教師は、過剰な希望的なことばは使用せずに、中学校生活を解説しながらアンケートを進めること、またことさら不安感を与えることがないように 2 小学校の担任教師と打ち合わせた。この打ち合わせは複数回持ったが、これは小中学校教師の“認識の齟齬”解消にも有効であった。小中学校の教育内容・方法を具体的に理解することで互いに肯定的評価が増加したためと思われる。

(3)調査内容

児童生徒には、5 問を設定した。各設問に対して、自分の今の気持ちに近い項目を選択(複数回答)するものとし、問 5 は自由記述とした。内容は次のとおりである。

〈入学前児童〉

1. 中学校へ入学することをどのように感じているか。
 - ①とても楽しみにしている。
 - ②どちらかといえば楽しみにしている。
 - ③どちらかといえば不安や心配がある。
 - ④とても不安で心配だ。
2. 中学校生活で楽しみにしていることはどんなことか。(複数回答)
 - ①新しい友達をつくること。
 - ②いい先生に会えること。
 - ③生徒会活動が充実していること。
 - ④部活動に参加できること。
 - ⑤体育大会や学校祭、修学旅行などの行事に参加できること。
 - ⑥教科によって先生が変わること。
 - ⑦新たな学習(英語など)が始まること。
3. 中学校での生活面について不安や心配に思っていることはないか。(複数回答)
 - ①不安や心配は感じていない。
 - ②学校のきまりがどのようなものか心配。
 - ③生徒会活動が不安。
 - ④部活動での練習が心配。
 - ⑤あたらしい友達との関係が心配。
 - ⑥学級担任の先生がどんな人か不安。
 - ⑦教科の先生がどんな人なのか不安。
 - ⑧部活動の顧問の先生がどんな人なのか不安。
 - ⑨どんな上級生がいるのか不安。
 - ⑩イジメがあ

るかどうか不安。

4. 中学校での学習面について、不安や心配に思っていることはあるか。(複数回答)

- ①中学校生活に心配や不安はない。 ②教科ごとに先生が変わるので授業が不安。 ③学習内容が難しくなるので心配。 ④家庭学習のしかたがわからないので不安。 ⑤定期テストのためにどんな勉強をしたらよいか心配。 ⑥苦手な教科があるので不安。 ⑦どんな成績がつくのか心配。 ⑧授業の進み方が早いのではないかと心配。 ⑨英語の学習についていけるかどうか心配。 ⑩その他(記述回答)

5. その他、中学校へ進学するにあたって不安なこと、知りたいことがあれば記述せよ。

(自由記述)

〈入学後生徒〉

入学前児童用と意味内容は同じだが、現在の中学校生活の状況を問う形に文言を整えた。

〈入学前保護者〉

保護者には、4問を設定した。各設問に対して、自分の今の気持ちに近い項目を選択(複数回答)するものとし、問4は自由記述とした。内容は次のとおりである。

1. お子さんが中学校へ入学するにあたり、どのように感じているか。

- ①中学校入学への心配はない。 ②中学校での生活(部活・友人関係)が心配。 ③中学校での学習に不安がある。

2. お子さんが中学生になるにあたり、楽しみにしていることはあるか。(複数回答)

- ①新しい友達ができること。 ②部活動に参加させること。 ③学校や学級の人数が多くなり人間関係が広がること。 ④教科によって異なる先生に指導を受けることができること。

3. お子さんが中学生になるにあたり、心配に思っていることはあるか。(複数回答)

- ①学習が難しくなるので心配。 ②上級生にいじめられないか心配。 ③中学校の先生が不安。 ④高校進学について心配。 ⑤中学校生活に慣れるか心配。 ⑥家庭での学習時間や学習の仕方が心配。 ⑦他の小学校の卒業生と仲良く生活できるか心配。 ⑧イジメやいやがらせが心配。 ⑨学習の中で分からないところがでてきた時、親切に教えてもらえるかどうか心配。

4. 中学校入学にあたって不安なこと、知りたいことがあれば記述せよ。(自由記述)

〈入学後保護者〉

入学前保護者用と意味内容は同じだが、子どもの現在の中学校生活状況を問う形に文言を整えた。

6. 結果

(1) 児童生徒の回答

①中学校生活への思いと感想

入学前は D、
H 小学校を合わ
せて、児童の 4
割近くが中学校

問1 中学校生活を送っている現在、どのような感想を持っていますか。	H 小		D 小		Total		%	
	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後
(1)とても楽しいです。	10人	12人	20人	40人	30人	52人	40%	63%
(2)どちらかといえばたのしいです。	4人	3人	21人	19人	25人	22人	33%	27%
(3)どちらかといえば、まだ不安や心配があります。	3人	1人	22人	5人	25人	6人	33%	7%
(4)まだ不安で心配です。	2人	1人	1人	3人	3人	4人	4%	5%

生活に不安や心配を抱いていたが、入学後「楽しい」「どちらかといえば楽しい」の合計が 9 割に達し、ほとんどの生徒が楽しく中学校生活を送っている様子が見て取れる。しかし、「まだ不安で心配」「どちらかといえばまだ不安で心配」と回答した生徒が 10 名いる。(合計回答数が対象者を超過しているのは、重複回答をした生徒がいるため。以下同様。) 中学校では、この 10 名の生徒について、学校不適応を予防するための積極的な教育相談の実施が必要であると判断した。

②中学校生活で楽しみなこと、よかったこと。

両小の児童とも、入学前入学後共に「新しい友人ができること」を楽しみにしており、入学後の満足度も 8 割以上である。「いい先生に会えた」については、入学前の期待数が 17 名に対し、入学後は 43 名と 5 割を超す高評価を得た。同様に部活動については、入学前入学後の回答数がほぼ同数であり、生徒の期待を裏切らない結果であったことが読み取れる。学校行事については、調査が 5 月であったため、まだほとんどの行事を経験していないこ

とから満足度が
低くなっている。
「英語などの新
しい学習」につ
いては、期待が
11 名に対し入
学後 38 名と半数近くが高評価となった。

問2 あなたが中学校生活を迎えて、よかったと思っていることがありましたらすべてに○をつけてください。	H 小		D 小		Total		%	
	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後
(1)新しい友達ができたと。	13人	16人	42人	54人	55人	70人	73%	84%
(2)いい先生に会えたこと。	2人	9人	15人	34人	17人	43人	23%	52%
(3)生徒会活動が充実していること。	1人	3人	5人	13人	6人	16人	8%	19%
(4)好きな部活動に参加できたこと。	7人	11人	41人	45人	48人	56人	64%	67%
(5)学校行事が楽しいこと。	8人	11人	42人	37人	50人	48人	67%	58%
(6)教科によって先生が変わること。	2人	6人	19人	20人	21人	26人	28%	31%
(7)新たな学習(英語など)ができたこと。	2人	10人	9人	28人	11人	38人	15%	46%

問3 あなたは、中学校の生活面で不安や心配に思っていることはありませんか。	H 小		D 小		Total		%	
	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後
(1)不安や心配は感じていません。	1人	7人	8人	24人	9人	31人	12%	37%
(2)これから学校のきまりを守っていけるかどうか心配です。	6人	3人	25人	13人	31人	16人	41%	19%
(3)生徒会活動が不安です。	3人	3人	13人	6人	16人	9人	21%	11%
(4)部活動での練習が心配です。	5人	1人	23人	22人	28人	12人	37%	14%
(5)あたらしい友達との関係が心配です。	6人	6人	31人	9人	37人	15人	49%	18%
(6)学級担任の先生がどんな人か不安です。	3人	0人	22人	1人	25人	1人	33%	1%
(7)教科担任の先生がどんな人か不安です。	2人	1人	22人	3人	24人	4人	32%	5%
(8)部活動の顧問の先生がどんな人か不安です。	1人	0人	16人	1人	17人	1人	23%	1%
(9)こわい上級生がいるので心配です。	8人	4人	41人	22人	49人	26人	65%	31%
(10)いじめやいやがらせがあるので不安です。	11人	5人	38人	9人	39人	14人	65%	17%

③中学校の生活面で不安や心配に感じていること。

「不安や心配は感じていない」が、入学後は 31 名に増加している。不安内容のすべての項目で回答数が低下し、入学後中学校生活への不安は大きく解消されたといえる。特に「教師に対する不安」(担任、教科担任、部活顧問)については、入学前の高回答から大きく減

少ししたことに注目したい。

しかし、入学後「心配、不安である」項目は低下したものの「学校の決まりを守る」「友達との関係」「いじめやいやがらせ」について、15名ほどが回答している。「こわい上級生との関係」についても、26名が回答している。心配不安が全体的には解消傾向にあるが、数名の「心配、不安」にしっかりと向き合う必要がある。この「いじめ、いやがらせ」の不安について別途調査を進める中で、小学校からの持ち越しの案件ではないかとの推測が小学校教師からなされた。アンケート結果を小中学校で共有して分析する中で、小学校時代のトラブルや負の人間関係をそのまま中学校に持ち込んでいることが発覚した。その後、小学校から積極的に情報提供を受け、中学校の責任において生徒指導をおこなった。

④中学校の学習面で不安や心配に感じていること。

学習に関する不安心配は、入学前と後で具体的内容に変化が見られる。「教科ごとに先生が変わること」への不安は、16名から4名と大きく減少した。同様に「英語の学習についていけるか心配」も8名から2名と減少、「定期テストの勉強のしかたが分からず心配」も35名から19名と減少した。「授業の進み方が早いのではないかと心配」は43名から24名へ減少した。これらは、中学校の学習指導の効果が表れたものと評価したい。また逆に心配不安が増加した項目は、「苦手な教科があるので心配」が43名から49名へ、「どんな成績がつくのか心配」が36名から38名に増加した。これら学習面の心配不安については、学

習内容が小学校と比較して格段に難しくなることは事実であり、生徒の個に応じた学習相談・指導体制の充実をすることが中学校に求められる。

問4 あなたは、中学校での学習面で不安や心配に思っていることはありませんか。	H 小		D 小		Total		%	
	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後
(1) 学習面での不安や心配はありません。	0人	6人	3人	16人	3人	22人	4%	27%
(2) 教科ごとに先生が変わるので授業が不安です。	4人	1人	12人	3人	16人	4人	21%	5%
(3) 学習内容が難しいのでこれからの心配です。	10人	7人	42人	35人	52人	42人	69%	51%
(4) 家庭学習のしかたがわからないので不安です。	1人	4人	13人	8人	14人	12人	19%	14%
(5) 定期テストの勉強しかたがわからないので心配です。	6人	5人	39人	14人	35人	19人	60%	23%
(6) 苦手な教科があるので不安です。	7人	9人	36人	40人	43人	49人	57%	59%
(7) どんな成績がつくのか心配です。	9人	6人	27人	32人	36人	38人	48%	46%
(8) 授業の進み方が早いのではないかと心配です。	8人	6人	40人	18人	48人	24人	64%	29%
(9) 英語の学習についていけるかどうか心配です。	7人	5人	32人	13人	39人	18人	52%	22%
(10) その他	0人	1人	8人	1人	8人	2人	11%	2%

(2) 保護者の回答について

①お子さんの中学校生活をどのように感じているか。

保護者から見た不安心配の比較では、「心配はない」が入学後に増加しているが、それでも「友人関係」「学習」について不安を感じている保護者が多いことが分かった。中学校では、日常の学級の様子を知らせる学級通信や個別指導を重要視

問1 あなたは、お子さんの中学校生活をどのように感じていますか。	H 小		D 小		Total		%	
	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後
(1) 中学校入学、学校生活への心配はありません	3人	4人	17人	25人	20人	29人	27%	36%
(2) 中学校での生活(部活・友人関係)が心配です。	8人	12人	24人	13人	32人	25人	44%	31%
(3) 中学校での学習が不安心配です。	8人	7人	31人	34人	39人	41人	53%	51%

し“保護者に見える”指導に力を入れることとする。

②お子さんが中学生になってよかったと思うことはあるか。

子どもが家庭でどれだけ学校の出来事を話題としているのか、推測できる設問である。多くが「新しい友達が

問2 お子さんが中学生になって、良かったと思っていることはありますか。	H 小		D 小		Total		%	
	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後
(1)新しい友達ができたと。	10人	16人	19人	33人	29人	49人	40%	60%
(2)好きな部活動に参加できたこと。	8人	10人	37人	44人	45人	54人	62%	67%
(3)学校や学級の人数が多くなり、人間関係が広がったこと。	9人	9人	13人	17人	22人	26人	30%	32%
(4)教科によって、異なる先生に指導を受けることができること。	5人	7人	21人	25人	26人	32人	36%	40%
(5)その他	0人	1人	0人	1人	0人	2人	0%	2%

できた」「好きな部活に参加できた」ことに満足している。共に入学後6割以上が満足している。また、「学校、学級の人数が多くなり人間関係が広がった」「教科によって異なる先生の指導を受けることができる」についても高評価である。

③お子さんが中学生になって心配していることはあるか。

保護者の学習に関する不安や心配が、入学後も解消されていないことを読み取ることができる。「学習内容が難しくなり心配」が50名と増加した。学年の6割以上の保護者ということになる。「家庭での学習時間や学習の仕方が分からず心配」「高校進学について心配」などもそれぞれ28名、43名と多くなっている。しかし、「教科によって先生が変わるので心配」「学習で分からないことを親切に教えてもらえるか心配」は、大きく解消されている。これは、中学校の教科担任との信頼関係が良好に築かれつつあるものと見ることができる。「家庭での学習時間や学習の仕方が心配」については、入学前後ともほぼ同数であり、保護者の感ずる不安心配が、中学生となってもそのまま持ち越されている。教科担任との信頼関係が好ましい方向にあることから、中学校では家庭での学習方法の指導等に力を注ぐ必要がある。

学習以外の生活面では、入学前の心配不安が大きく解消されている。特に「上級生にいじめられるのが心配」は、20名もが不安を訴えていたが入学後は1名となっている。また、「他の小学校の

卒業生と仲良く生活できるか不安」は0名に、「いじめやいやがらせが心配」については2名に減少した。この「いじめや

問3 お子さんが中学生になって、心配していることがありますか。	H 小		D 小		Total		%	
	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後	入学前	入学後
(1)学習内容が難しくなるので、今後が心配です。	8人	11人	33人	39人	41人	50人	56%	62%
(2)上級生にいじめられているのが心配です。	4人	1人	16人	0人	20人	1人	27%	1%
(3)教科によって先生が変わるのが心配です。	2人	1人	8人	5人	10人	6人	14%	7%
(4)高校進学について心配です。	2人	7人	27人	36人	29人	43人	40%	53%
(5)中学校生活に慣れず心配です。	4人	1人	10人	2人	14人	3人	19%	4%
(6)家庭での学習時間や学習の仕方が心配です。	6人	6人	20人	22人	26人	28人	36%	35%
(7)他の小学校の卒業生と仲良く生活できるか心配です。	7人	0人	7人	0人	14人	0人	19%	0%
(8)いじめやいやがらせがあり心配です。	10人	1人	22人	1人	32人	2人	44%	2%
(9)学習で分からないところを親切に教えてもらえるか心配です。	4人	2人	25人	2人	29人	4人	40%	5%

がらせ～」の記述については、小学校と連携した指導経緯の詳細を保護者に伝え、不安心配の払拭を図った。

7. まとめ

本稿では、「スムーズな学校間の接続」の観点から小中連携の必要性が強調されるなかにあつて、視点が定まりづらい小中学校連携について考察した。本調査の実施にあたり、児童生徒・保護者が抱える不安心配の具体内容についてはある程度推測できるものもあつたが、小学校から持ち越しの“いじめいやがらせ”が発覚し、対処することができたのは大きな成果であつた。また、小中学校教師がこのアンケートを考察する中で、学校不適応防止の観点から改めて重点化して取り組むべき次のことがらが指摘された。

中学校においては、①学習指導方法研究の重要性、特に家庭での自学自習をどのように指導するか。②中学校 3 年間を見通した早期の進路指導が保護者の不安解消に有効であるということ。また、保護者からの情報提供の要望も強いこと。③学級担任、教科担任、部活動顧問など、教師と生徒保護者の信頼関係を深めることが、中一ギャップ防止の基礎となること。④生徒の人間関係のトラブルについて、小学校時代の情報を承知したうえで指導にあたるのが、早期解決の糸口となること。

小学校においては、①今まで中学校入学に向けての不安心配調査は実施したことがなく、児童保護者の意識をはかるうえで、本調査実施の意義は大きいこと。②中一ギャップ防止を見越したきめ細かい生徒指導が小学校でも必要であり、中学校入学後の新しい人間関係を積み上げていく力を育てておかなければならないこと。③中学校で難しくなる学習内容と授業進度に、早期に適応できる学習の基礎と家庭学習の習慣化の定着をおこなうこと。小学校 6 年間を見通した全校的な取り組みとして、学年に応じた家庭学習の習慣化を学校課題としていかなければならないこと。— などである。

中一ギャップは全国的に益々深刻な状況にある。今教師や保護者は、それぞれの学校で起きている事実に真正面から向き合い、悩める子どもたちに寄り添いながら、解決に向けた教育実践に真摯に取り組んでいる。このような中一ギャップの防止解決に、本試案が何らかの視点を提供することができれば幸いである。

引用・参考文献

- 学校基本調査（平成 26 年度速報）文部科学省
生徒指導に関する調査報告書（平成 27 年 12 月）北海道中学校長会
白井 博（2012）小学校から中学校への学校移行の学校適応と学習動機に対する影響（1）

札幌学院大学総合研究所

冨家美那子・宮前淳子（2009）教師の視点から見た中一ギャップに関する研究 香川大学
教育実践総合研究

鈴木宏昭他（1989）教科理解の認知心理学 株式会社新曜社 54-59

中央教育審議会初等中等教育分科会学校段階間の連携・接続等に関する作業部会 小・中学
校間の連携・接続に関する現状と課題認識 小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理
（骨子案）（平成24年4月23日）文部科学省

（本稿の執筆にあたって、D小学校元校長 吉田文彦氏からデータ提供を頂いたことに深く
感謝の意を表したい。）